

桜の伝言

カレン

夜が白む頃から、西伊豆では鶯が鳴く。二月上旬にケキョツと声をあげ、発声練習は日に日に熱を帯び、三月には雑木林や竹林のあちこちで谷渡りの競演となる。河津桜は二月下旬に満開を迎え、染井吉野は四月初めに、紺碧の空と海を背景に咲き誇る。「こんなに春が早くて暖かくてきれいなどこないわぁ」と言いながら、大家の加代さんの娘は、泊まりもせずに都会へと帰って行く。沼津市と統合される前は、宇船山と言った。修善寺から土肥の港をまわり葛折を戸田へ向かう途中の山間に舟山はある。二十世帯足らずの半数が、ひとり暮らしの高齢者だ。帰る人のない民家が海から吹きあげてくる西風に傷み崩れてゆく。その空き家の一軒を、舟山では大地主の加代さんから借り、自分で手入れすることを条件に、月二万円で住んでいる。三月に古希を迎えた純さんと去年還暦に到達した私、十六歳になるコーギーのマリヤと三歳になったばかりのラブラドルのクララ。四畳半の寝室にシングルベッドを二つ並べてくっつけ、クララ、私、マリヤ、純さんの順で眠っている四大家族だ。本当なら蒲団を敷きたいところだが、隙間だらけの床や窓から十センチはある大蜘蛛や名前も知らない虫達や時にはムカデまで侵入してくる。蒲団にもぐり込んできたムカデに足を刺されたと、片足を引き摺って歩く村の人の話に、慌てて近くのリサイクルセンターへ走り、四十センチほどの高さの簡易ベッドを二つもらってきた。東京に居た時生業としていた英語教室の中学生や高校生のお嬢さん方は、机を這ってくる蟻にさえ、悲鳴をあげた。彼女達の清潔で美しい顔を思い出す度、フツと口唇が弛んでくる。無理いっ、絶対そんなとこ、住めないっ！ でもね、空気は断トツきれいよ。空気って、ほら、お金じゃ買えないでしょう。

海から坂道を上ってくる蟹に御伽噺の匂がする。気配に大空を見上げれば、トンビがゆうゆうと蛇をくわえて飛んで行く。海と空の青々さが、歩いているだけで、じんわり体に染みてくる。

蜜柑畑は収穫を終え、春は甘夏と八朔だ。散歩しながら、一つ二ついただいてくる。あつちの坂道のより、こつちの坂道のほうが甘いね、と、半分ずつ純さんと食べ比べる。国道に上がるには、いくつもの急な登り坂。海へ降りるのは、西風の吹き上げる長い長い下り坂。そこから崖に刻まれた石段を三十メートルほど下りる。砂浜のない岩だらけの海岸が広がっている。

子供ん頃は、ようみんな泳いだもんだ。どの子も真っ黒に日焼けしとった。舟山の分校にやあ教員住宅もあってなあ、先生と奥さんが、子供達の面倒みとった。多い時にやあ子供が四十人からおったんよ。五年生になつと山道を一時間かけて戸田の本校へ通うだども、舟山の山猿ちゆうていじめられてなあ、分校の先生が、そんなら戸田のかさほつて言い返したれつてな。かさごはなあ、口ばつか大きゆうて頭からつぽだと。水泳大会だつちやうに、舟山の子供らは水着なんか持つとらん。女の子もパンツ一丁で泳いで、脱げそうになる。そいでも負けとらん。水泳も勉強も、舟山の連中が一番できただよ。

子供時代の思い出を語る時、まるで昔にかえたように、村の婆様達はキャツキャツと笑う。そして村中が全員親戚だ。苗字は三つしかない。だから名前前で呼ぶ。外から嫁に来たのは加代さんが最初だった。土肥からやってきてもう五十年。加代さんは言う。婆つちやんどころかお婆までいてね、主人は八人兄弟の末っ子よ。末生りだから体が弱かった。それで外には働きに出ないで家継ぐことになったのよ。あの頃は炭焼きははいつて山もお金になったし、蜜柑なんか手伝い頼むくらい高く売れたのよ。大晦日には徹夜で四十人分の蕎麦打ったもんよ。大変だったけど楽しかった。まさかひとりになるなんて、あの頃は思いもしなかった。子供達は外に出て元気でやってるから、重い残すことはないけど、蜜柑畑は私が最後。自分の始末をどうつけるか、桜みたいにきれいに散れるといいんだけどねえ。

加代さんが見上げた国道沿いの染井吉野は、葉桜になっている。
病院の敷地に咲いた満開の桜の下で、車椅子に乗った私の母は呟いた。

これが最後の桜ねえ……。

次の春、家の玄関に立て掛けた車椅子はもうなかった。母に会えなくなってから、桜の季節が来る度に、母への思いが深くなる。

家の前の竹藪は加代さんの土地だ。膝までの長靴をはいた加代さんが、竹の籠を背負ってやってきた。「そろそろだよ」の声に純さんは頷き、加代さんの籠を自分の背中に掛け替えて、鎌を片手に二人は竹藪へはいつて行く。筍の灰汁抜きをするのは私の役目。米の磨ぎ汁で煮るのがいいと、加代さんに教わった。東京にいた頃は袋詰め of 灰汁を抜いた筍を買っていた。米の磨ぎ汁が役に立つとは知らないから、磨ぐ手間のいらぬ洗米を使っていた。それでも筍御飯を食卓にのせると、春が来たと、ビルの狭間の空を見上げたものだ。今では磨ぎ汁から上る甘い筍の香が台所中に立ちこめる。本当に春に

なつたと知らせてくれる。

「そうかね、もう行くんだ」

加代さんの声を背に、軽自動車に荷物を積んだ。四月中頃の晴れた日に、私達は山梨県鳴沢村の富士山の麓へと帰る。中古のログハウスを居抜きで十年ほど前に買った。二人ともバツイチで、それぞれの子供の世話にならないと決めていた。離婚という仕切り直しがあつたから、東京の十分の一の価格でも、やっと手に届くマイホームだった。住んでみると夏仕様の別荘造りは、マイナス二十度まで下がる厳冬に予期せぬ弱さを露呈した。窓は結露して開かなくなった。熱線を巻いた水道管が、わずかな綻びに破裂した。老犬のマリヤは、雪道の冷たさに、前足を跳ねあげては転んだ。翌年から、声を掛けてくれる人があり、冬だけ伊豆の舟山で過ごすことになった。二つの家を移動するうち、荷物が徐々に少なくなった。喪服と夏冬それぞれ三セットの衣類があればいい。年金暮らしゆえ、盛装して出かける場所もお金もない。生まれて初めて、家計簿をつけるようになった。無駄が見え、当初の予算より二万円節約できる。別荘地内の定住組は、ほとんどが年金生活者だ。たまにやってくる別荘族とは裏腹に、慎ましやかに暮らしている。同世代の都会から移り住んできた友人もいる。それで私は活気づく。純さんは村の囲碁クラブの碁敵から、毎日のようにお呼びがかかる。車で十分も走ると、シヨッピングモールがある。冬眠していた消費衝動が目覚めます。帰ってきてしばらくは、節約を忘れてフラフラする。鳴沢は今年は六十五年ぶりの寒さだった。久し振りだと、近所の御主人が立ち寄った。「こんな冬でも、婆さんは生きのびたよ」と、溜息まじりに茶をすすった。オフクロより、女房のほうが心配だよ。彼の頬が引き攣った。六年寝たきりの母親は、息子の彼に下の世話をされるのを嫌う。介護の負担は奥さんばかりのしかかる。こんな苦勞を子供達にはさせたくない、俺は絶対ポックリ逝くと、彼は暫く息巻いた。帰って行く彼の背中が、去年よりずっとまろくなっていた。

四月下旬にこのあたりでは桜が咲く。今年はまだ、河口湖畔に映える桜の木の下を、ふたりで歩くことができる。けれど、いつかどちらかが欠けて、この季節をひとりで迎える日が来るだろう。

必ず終わりはくるものよ。

艶やかに華やかに、満開の桜が言い放つ。